くらしの舞台

名取川と海によってできた平野

名取市の平野部は、大きく二つの水の作用によって形づくられています。一つは、昔海だったところから海岸線が東にひく際、波の作用で海砂が残されて高いところができたもので、浜堤（ひんてい）と呼ばれます。もう一つの作用は名取川や増田川が氾濫（はんらん）した時に運ばれた土砂が川のまわりにたまったもので、自然堤防と呼ばれる微高地（びこうち）となります。自然堤防に囲まれた低いところは水分の多い土地で、後背湿地（こうはいしっち）と呼ばれています。

微高地上には上余田遺跡のような縄文時代にさかのぼる遺物が出土した場所もありますが、平野の拡大につれて、弥生時代ごろから集落が数多くつくられるようになっていきます。

昭和39年頃の増田

昭和39年頃の閖上

昭和46年頃の下増田

臨海部の海岸は自然の宝庫

　名取市の海岸部は、江戸時代から防潮林としてクロマツが植えられ、海岸線から幅約 100～300mにわたり、見事な白砂青松の美しい砂浜として親しまれてきました。

　広浦湾周辺では干潟が発達し、シギ、チドリ類など水鳥の格好の渡来地となっているほか、砂浜植物群落などが見られ、

貴重な自然が残る海岸として「仙台湾海浜県自然環境保全地域」に指定されています。

　津波で大きな被害を受けましたが多くの方々の清掃、植林などの努力により、少しずつ昔の姿を取り戻しつつあります。

閑上・北釜の海岸線（震災前の航空写真）

せんだいわんかいひん

仙台湾海浜県自然環境保全地域

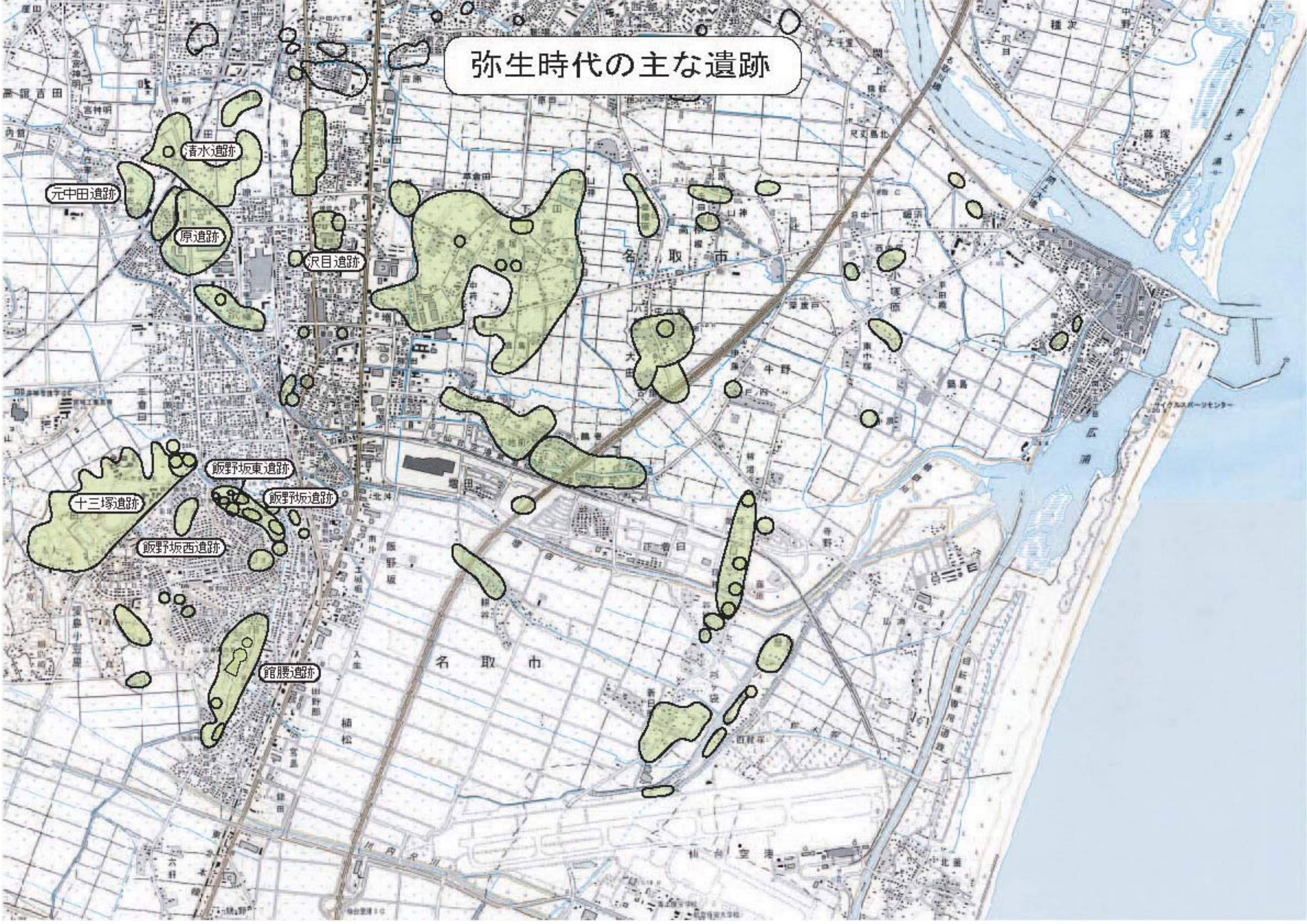
平野に刻まれた足跡

平野部での暮らしの始まり

　名取市内の平野部で人びとの生活のあと（遺跡）が見られるようになるのは、弥生時代からです。その時代、名取川沿いに発達した自然堤防（しぜんていぼう）上に遺跡が現れ始めます。自然堤防上の微高地（びこうち）は水はけが良く、集落や畑地に適していたようです。また、ここに囲まれた後背湿地（こうはいしっち）は水分を保ちやすく、稲作に適していたのでしょう。

　平野部では名取川や増田川が運んだ養分の多い土が堆積（たいせき）し、ゆっくりと多くの農作物を生み出す力が高まっていったようです。

弥生時代の主な遺跡


清水遺跡
元中田遺跡
原遺跡
沢目遺跡
十三塚遺跡
飯野坂東遺跡
飯野坂遺跡
飯野坂西遺跡
館腰遺跡
名取市
名取市
仙台空港

～原遺跡～

所在地：田高字原・字南

原遺跡では、弥生時代のごみ捨て場やお墓が見つかりました。ごみ捨て場では、たくさんの壊れた土器や石器がみつかり、中には土器や石器を作る途中で失敗したと思われるものもありました。お墓は土器に遺体や骨を入れて地中に埋めたもので、15基のお墓がまとまって見つかりました。

このほか、稲穂をつみ取る道具の石包丁（いしぼうちょう）や、鎌のように使われた板状石器（いたじょうせっき）が見つかっていて、稲作をしていたこともわかっています。

人々の住まいはまだ見つかっていませんが、この近くに集落があったと思われます。

ごみ捨て場

土器棺墓群（どきかんぼぐん）

土器棺の出土状況

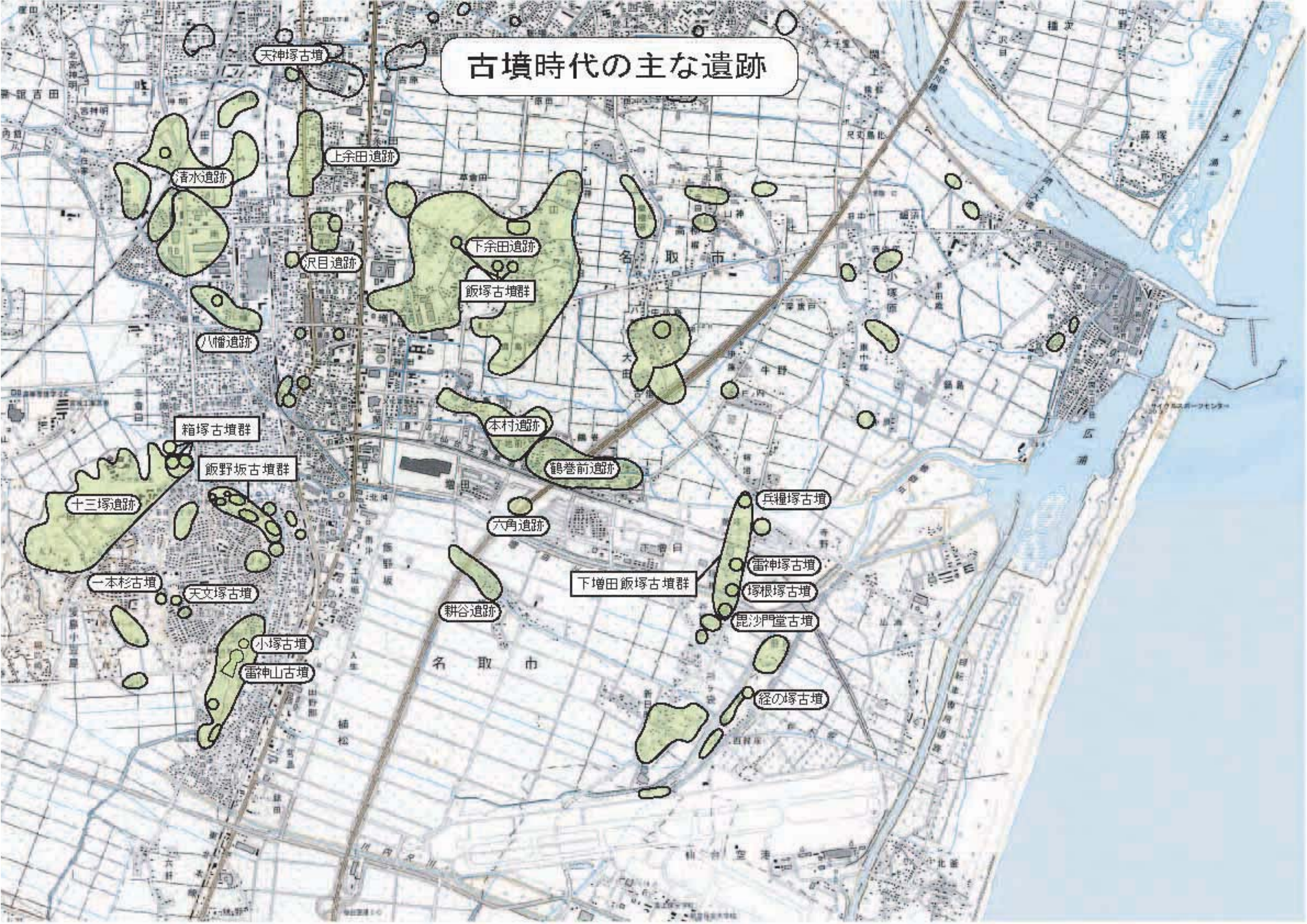
古墳文化の始まり

　権力をもった人（豪族）が亡くなると、その力の大きさを示すために、土を盛ってつくったお墓（古墳）に葬りました。

　名取市内には多くの古墳があり、東北地方の中で全長60mを超える古墳が最も多くあるところです。大半は愛島や館腰地区の丘の上にありますが、増田地区の天神塚古墳や下増田地区の下増田飯塚古墳群など、平野部の浜堤上にも見られます。

　これらの古墳は、この地域に有力な豪族がいたことと、古墳をつくるための経済的な基盤がしっかりしていたことを物語っています。

古墳時代の主な遺跡


天神塚古墳
上余田遺跡
清水遺跡
沢目遺跡
下余田遺跡
飯塚古墳群
八幡遺跡
箱塚古墳群
飯野坂古墳群
十三塚遺跡
本村遺跡
鶴巻前遺跡
六角遺跡
兵糧塚古墳
雷神塚古墳
下増田飯塚古墳群
塚根塚古墳
毘沙門堂古墳
一本杉古墳
天文塚古墳
耕谷遺跡
小塚古墳
雷神山古墳
経の塚古墳
名取市
名取市

つくられた多くの古墳

ここでは、増田・下増田・閖上地区の古墳を紹介します。

～下増田飯塚古墳群（しもますだいいづかこふんぐん）～

所在地：下増田・杉ヶ袋・美田園

　海岸線から約２ｋｍ内陸に、南北方向に延びる標高 2m前後の浜堤（ひんてい）があり、この上に下増田飯塚古墳群があります。かつては「下増田七塚」と呼ばれていましたが、現在では兵糧塚（ひょうろうづか）古墳・雷神塚古墳・毘沙門堂古墳・塚根塚（つかねづか）古墳の４基が確認されています。

　平成 16～20 年に発掘調査を行った結果、7m～50mの円墳を主体とする古墳が十数基見つかりました。

　ほかには 4～5 世紀ごろの竪穴遺構（たてあないこう）も見つかりました。中には古墳のすぐ近くから発見されたものもあり、古墳づくりと関係のある施設だったかもしれません。

毘沙門堂古墳（びしゃもんどう）

所在地：杉ヶ袋字前沖

　下増田飯塚古墳群の１基で、直径50m、高さ約８mの５世紀中ごろの古墳です。古墳の形は円墳（えんぷん）もしくは帆立貝式の前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）と考えられています。

　平成６年の集中豪雨で墳丘（ふんきゅう）が一部崩落した時に、古墳の上に並べられていたと思われる円筒埴輪（えんとうはにわ）と朝顔形埴輪（あさがおがたはにわ）の破片がまとまって見つかりました。

毘沙門堂古墳

塚根塚古墳

所在地：美田園５丁目

　下増田飯塚古墳群の１基で、平成16～20年に発掘調査を実施しました。周溝（墳丘のまわりに掘られた溝）の内縁径が約28m、周溝の上幅が約9m、墳丘の高さが約3.3mの円墳です。調査時点ですでに墳丘の東側半分以上が失われており、埋葬施設や副葬品と思われる遺物は見つかりませんでした。

　発掘調査では、古墳の下から小型の円墳（19号墳）が発見され、土師器など出土遺物から、古墳時代中期につくられたことがわかりました。このため、塚根塚古墳は、ほぼ同じ時期か、やや新しい時期のものと考えられます。

塚根塚古墳発掘の様子

古墳の周講から出土した土器

経ノ塚古墳

所在地：下増田字西経塚

　直径 36m、高さが約 7mの円墳です。明治 45 年に発掘調査が行われ、鎧や家の形の形象埴輪や円筒埴輪が見つかりました。大正 12 年には、長持型組合石棺が出土し、２体分の人骨、直弧文のある鹿角製刀装具をつけた直刀2口、刀子1口、漆塗りの櫛などが見つかりました。

　この古墳は５世紀中頃に畿内政権と密接な関係を持つ有力者の墓と考えられています。長持型組合石棺・鹿角製刀装具、家形埴輪・鎧形埴輪は、日本最北の出土例です。

経ノ塚古墳

よろいがた はに わ
鎧形埴輪

よろいがた はに わ
鎧形埴輪

いえ がた はに わ
家形埴輪

雷神塚古墳（らいじんづか）

所在地：美田園５丁目

下増田飯塚古墳群の１基で、直径30m、高さ約５mの円墳です。墳丘は２段築成（ちくせい）でつくられています。古墳時代中期～後期の古墳と考えられます。これまで詳細な調査がなく、詳しいことはわかっていません。

雷神塚古墳

天神塚古墳

所在地：上余田字市坪

南北30m、東西26m、高さ2.8mの方墳です。古墳のまわりには幅8mの周溝が巡っています。昭和54年に測量調査、昭和55年と61年に古墳周辺の一部を発掘調査しています。

墳丘から古墳時代前期の土師器（広口壺）や壺型埴輪が出土しており、４世紀代につくられた古墳と考えられます。

この古墳は墳頂部が平坦に削られて天神社が祀られていますが、増田周辺地域に現存する唯一の古墳時代前期の古墳です。

天神塚古墳

飯塚古墳群

所在地：下余田字飯塚

飯塚古墳群は、３基の円墳で構成されます。

昭和 30 年頃に、古墳群の 1 基のセト山古墳を掘削した際、蕨手刀1 振りと土師器坏１０数枚、土師器壺が出土しています。

飯塚古墳群

古墳時代のムラと人々のくらし

　古墳時代には多くの古墳がつくられただけでなく、市内各地からたくさんの集落跡（ムラ）が見つかっています。

　この時代が始まる頃、海岸線が現在とほぼ同じ位置になり、平野部が大きく広がりました。名取川沿いに発達した自然堤防や、海岸線が後退していく時に作られる浜堤と呼ばれる微高地上には、徐々に集落ができました。微高地の周りに広がる湿地は弥生時代と同じく水田として利用したのでしょう。

　稲作中心の生活をしていた当時の人々にとって、周辺に湿地の広がる自然堤防や浜堤は、理想的な土地だったに違いありません。